



札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	保健医療総論 1 における学生へのアンケートを用いた学習効果に関する検討
Author(s)	吉野, 淳一;後藤, 葉子;佐藤, 公美子;根木, 亨;中村, 充雄;中井, 夏子; 長多, 好恵;横山, まどか;大塚, 知子;古名, 丈人;池田, 望;齋藤, 重幸; 古畑, 智久;松村, 博文
Citation	札幌保健科学雑誌,第 4 号:73-78
Issue Date	2015 年 3 月 1 日
DOI	10.15114/sjhs.4.73
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6306
Type	Research Paper
Additional Information	
File Information	n2186621X473.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

報告

保健医療総論1における学生へのアンケートを用いた学習効果に関する検討

吉野淳一¹⁾、後藤葉子²⁾、佐藤公美子¹⁾、根木 亨³⁾、中村充雄²⁾、中井夏子¹⁾、長多好恵¹⁾、横山まどか¹⁾、大塚知子¹⁾、古名丈人³⁾、池田 望²⁾、齋藤重幸¹⁾、古畑智久¹⁾、松村博文³⁾

¹⁾ 札幌医科大学保健医療学部看護学科

²⁾ 札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

³⁾ 札幌医科大学保健医療学部理学療法学科

本研究の目的は、保健医療総論1の学習効果をアンケートにより検討することである。保健医療総論1を受講した保健医療学部看護・理学療法学科・作業療法各学科の1年生計90名を対象に授業の開始前と終了時に同じ内容のアンケートを配布し協力を求めた。アンケートは、開始前アンケートが30部（回収率33.3%）、終了時アンケートが74部回収された（回収率82.2%）が、アンケートの一部に不備があり、終了時アンケートの有効回答は73部となった。開始前と終了時のアンケート結果をみると、15の質問項目のそれぞれにおいて最多の回答は、おしなべてより肯定的な回答の選択肢へひとつ移動しているか、その選択肢にとどまってもより肯定的な選択肢の割合を増やしていた。自由記述からは、学生が授業に対する不安と緊張をみせながらも前向きで意欲的な姿勢を示し、授業を通じて仲間を得、コミュニケーションへの理解を深めている様子が伺えた。

キーワード：保健医療総論1、学習目標、アンケート

Questionnaire survey of the achievement of the learning targets by students in the course Health Sciences 1

Junichi YOSHINO¹⁾, Youko GOTO²⁾, Kumiko SATO¹⁾, Tohru NEKI³⁾, Mitsuo NAKAMURA²⁾, Natsuko NAKAI¹⁾, Yoshie NAGATA¹⁾, Madoka YOKOYAMA¹⁾, Tomoko OOTSUKA¹⁾, Taketo FURUNA³⁾, Nozomu IKEDA²⁾, Shigeyuki SAITOH¹⁾, Tomohisa FURUHATA¹⁾, Hirofumi MATSUMURA³⁾

¹⁾ Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

²⁾ Department of Occupational Therapy, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

³⁾ Department of Physical Therapy, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

The purpose of this study was to determine the achievement of the learning targets by students in the course Health Sciences 1. The subjects were 90 first-year nursing, physical therapy and occupational therapy students in the School of Health Sciences who took the course. At the time of initiation and at the end of the class, we distributed a questionnaire to our students and requested their cooperation. We collected 30 questionnaires (response rate: 33.3%) at the time of the initiation of the class and 74 questionnaires at the end of the class (response rate: 82.2%). But, there was incompleteness in the part of the 74 questionnaires, and the effective number of answer was 73. The ratios of more affirmative answer increased in questionnaires at the end of the class more than at the time of the initiation of the class. The students indicated that they gained confidence, motivation and a new appreciation as medical personnel of the importance of personal communication in medical treatment.

Key words : Health Sciences, learning target, questionnaire

Sapporo J. Health Sci. 4:73-78(2015)

I. はじめに

平成24年4月より札幌医科大学保健医療学部では、新カリキュラムが施行され、同年4月に入学した1年生から適用された。本学保健医療学部では、毎年4月上旬に4年間を通して看護・理学療法・作業療法の3つの学科が合同で学ぶ保健医療総論という科目を設定している。この科目は学科の壁を超え、対人コミュニケーション力や患者理解、自らと他の職種の専門性の理解といった医療人としての素養を身につけチーム医療に貢献する人材を育成しようとするものだが、学年の進行に伴いその学習内容を発展させていく。皮切りとなる保健医療総論1（1年次）は基本的な対人コミュニケーションを実践し、保健医療総論2（2年次）では保健医療福祉の対象となる高齢者と実際に関わり、保健医療総論3（3年次）では医療機関における他の医療専門職の役割を理解して連携力を身につけ、保健医療総論4（4年次）では健康障害を持つ人へのインタビューを通して保健医療福祉チームにおける各職種の専門性と役割を学ぶ。そうして医療チームの一員として専門性を発揮できるようデザインされている。

保健医療総論1は、近年、対人関係の希薄化^{1) 2) 3)}が懸念されるなか、医療人には病気や障害を持つ人との意思疎通、医療現場での確実な情報伝達が必要なことから、一定の水準のコミュニケーション力が求められることを踏まえて構成を考えた。その結果、基本的社会常識である面接時のマナーやコミュニケーション技術、情報の取り扱いや管理について、講演、演習、報告会といった形式で学ぶこととした。1日目は、授業のオリエンテーションの後、コミュニケーションの構成要素や非言語コミュニケーション、対人マナーについて外部講師の講演を聞く。その後、接遇の実際について視聴覚教材で学び、ロールプレイで体験的理解を促す。さらに翌日のインタビューに備えて電話でインタビューにアポイントメントを取ると同時に、インタビューする内容や方法を企画書にする作業を行う（ロールプレイ演習）。2日目は、演習として先に約束済の大学・附属病

院の多様な立場の関係者を午前と午後一件ずつ訪問し、インタビューする（インタビュー演習）。3日目（最終日）は、2日間の学習内容を報告会で共有し、コミュニケーションに対する理解を深めることとしている。これらの学習は、講演は1年生全員で受講するが、その後の演習や報告会は90名の学生を5人一組に分け、そのグループ単位での学習を基本にする。各グループには、2名の教員を配置することで密接な指導・相談ができるようにし、学習目標（図1）への到達を目指している。

上記のような体制のもと、平成24年にスタートした保健医療総論1も3年が経過し、授業内容とその運営がほぼ安定してきた。そこで、平成26年4月の保健医療総論1から、学習効果を検討し授業の改善に役立てるため授業開始前と終了時に学生に向けたアンケートを実施したのでその結果を報告する。

II. 目 的

保健医療総論1を受講する学生にアンケートを実施し学習効果を検討する。

III. 対象と方法

1. 対 象

平成26年4月7～9日に開講された保健医療総論1を受講した札幌医科大学保健医療学部看護学科50名・理学療法学科・作業療法学科各20名の1年生計90名を対象とした。

2. 方 法

新入生オリエンテーションの際に無記名自記式のアンケートの依頼をし、保護者への説明が必要な学生にはアンケートの趣旨が書かれた保護者向け依頼文を活用して欲しい旨を伝えた。アンケートは、保健医療総論1の開始前・オリエンテーション時（以降、開始前と省略）と最終日の全授業終了時（以降、終了時と省略）の2回実施した。開始前には、口頭と文書でアンケートへの協力を要請した。その

1. 基本的対人コミュニケーションを実践できる。
2. 医療人として必要な倫理的態度の基本を理解しその概要を述べることができる。
3. 時と場所などをわきまえて適切なコミュニケーション技法を用い、必要な情報を得ることができる。
4. 個々に経験した課題を基に、医療人を目指す人としての基本的なコミュニケーションの重要性を議論し、自己の課題を述べるができる。

図1 保健医療総論1の学習目標

-
- ① 良いコミュニケーションに必要なことは何かわかる
 - ② メッセージの交換に際しては受け手の意味づけが重要であることを理解している
 - ③ 対人コミュニケーションでは表情が大きな影響をもたらすことを理解している
 - ④ 対人コミュニケーションにおける非言語メッセージの役割について理解している
 - ⑤ コミュニケーションに関するこれまでの自分の経験を言語化して他者と共有できる
 - ⑥ 他の学生と検討を重ねて目的達成のための企画・立案・実施ができる
 - ⑦ 面識のない目上の人に電話で依頼をする際の事前の準備ができる
 - ⑧ 面識のない目上の人と話す際、ことばづかいに配慮して挨拶し会話できる
 - ⑨ 面接の目的をわかりやすく伝え、記録の許可を得る必要性が理解できる
 - ⑩ 面接を通じて必要な情報収集を行うことができる
 - ⑪ 面接時の相手の反応を見て、進行の調整を考慮することができる
(面接時の相手の反応を見て、進行を調整することができる)
 - ⑫ 面接終了時に適切にお礼を述べることができる
 - ⑬ 得られた情報の扱いについて情報提供者に伝えることの必要性が理解できる
(得られた情報がどのように扱われるか情報提供者に伝えることができる)
 - ⑭ 実施した内容を他者にわかりやすく説明し共有することができる
 - ⑮ 自分の役割を認識して他の学生を助けたり協調したりできる
-

図2 アンケートの質問項目（カッコ内は終了時）

際、アンケートを実施することで学習効果を検討し授業改善に役立てること、アンケートへの協力は任意であること、アンケートへの協力やアンケートの回答内容が成績評価とは一切関係しないこと、アンケートの投函をもってアンケート調査に同意したとみなすこと、を説明した。アンケートは教員から学生に直接配布し、それぞれ期日を指定して任意に所定の回収ボックスに投函するよう依頼した。

3. アンケートの構成と分析

アンケートは、15の質問項目それぞれに、5つの選択肢（まったくそうではない、そうではない、どちらともいえない、まあまあそうである、まったくそうである）から一つを選んでもらう五肢択一形式の設問と自由記述からなる。15の質問項目は、3日間の保健医療総論1の授業内容（講演、ロールプレイ演習、インタビュー演習、報告会）の学習の目標に準じて作成した（図2）。質問項目の文言は、時制や役割分担による課題の実現可能性を斟酌して、図中の質問項目の番号⑪と⑬の2つのみ前後で若干の違いを持たせた。⑪では、開始前は「面接時の相手の反応を見て、進行の調整を考慮することができる」となっているが、終了時では、「面接時の相手の反応を見て、進行を調整することができる」とその表現を違えている。また⑬では、開始前は「得られた情報の扱いについて情報提供者に伝えることの必要性が理解できる」としているが、終了時では「得られた情報がどのように扱われるか情報提供者に伝えることができる」と実践を経験した学生が自然に答えやすいように変えている。また自由記述は、開始前では「授業に臨むに際して思うことがあれば何でもけっこうです。記

入して下さい」と依頼し、終了時では「授業の終わりに際して思うことがあれば何でもけっこうです。記入して下さい」と依頼した。アンケートの集計と処理には、マイクロソフト社製 Excel 2013 windows 版を用いた。

4. 倫理的配慮

本報告の作成に際して札幌医科大学倫理審査委員会の審査を受け承認を得た。

IV. 結 果

アンケートの回収数は、開始前アンケートが30部（回収率33.3%）、終了時アンケートが74部（回収率82.2%）であった。ただし、回収された終了時アンケートのうちの一部に不備があり、終了時アンケートの有効回答は73部となった。

1. アンケート結果の概略（開始前）

アンケート結果の概略（表1）のうち開始前をみると、15の質問項目それぞれにおいて‘まったくそうである’に最多の学生が回答している項目は③と⑫の2つだった（どちらも20人、66.7%）。反対に‘そうではない’にもっとも多くの回答があった項目は、⑤であった（5人、16.7%）。肯定的な回答が‘まったくそうである’に届かず‘まあまあそうである’にとどまった質問項目は、⑥の一つだけであった。

同じく開始前で、‘そうではない’という選択肢に回答のあった質問項目が④、⑤、⑦、⑧、⑨、⑩、⑬、⑭の8

表1 アンケート結果の概略

開始前・オリエンテーション時							n=30
質問項目	選択肢 まったくそ うではない	そ う で は な い	ど ち ら と も い え な い	ま あ ま あ そ う で あ る	ま っ た く そ う で あ る	無 回 答	計
①	0	0	13 (43.3)	15 (50.0)	2 (6.7)	0	30 (100)
②	0	0	5 (16.7)	17 (56.7)	8 (26.7)	0	30 (100)
③	0	0	1 (3.3)	9 (30.0)	20 (66.7)	0	30 (100)
④	0	1 (3.3)	5 (16.7)	13 (43.3)	10 (33.3)	1 (3.3)	30 (100)
⑤	0	5 (16.7)	16 (53.3)	8 (26.7)	1 (3.3)	0	30 (100)
⑥	0	0	11 (36.7)	19 (63.3)	0	0	30 (100)
⑦	0	1 (3.3)	15 (50.0)	11 (36.7)	3 (10.0)	0	30 (100)
⑧	0	1 (3.3)	4 (13.3)	20 (66.7)	5 (16.7)	0	30 (100)
⑨	0	2 (6.7)	10 (33.3)	10 (33.3)	7 (23.3)	1 (3.3)	30 (100)
⑩	0	3 (10.0)	14 (46.7)	10 (33.3)	3 (10.0)	0	30 (100)
⑪	0	0	18 (60.0)	9 (30.0)	3 (10.0)	0	30 (100)
⑫	0	0	1 (3.3)	9 (30.0)	20 (66.7)	0	30 (100)
⑬	0	1 (3.3)	4 (13.3)	15 (50.0)	10 (33.3)	0	30 (100)
⑭	0	2 (6.7)	18 (60.0)	8 (26.7)	2 (6.7)	0	30 (100)
⑮	0	0	9 (30.0)	20 (66.7)	1 (3.3)	0	30 (100)
終了時							n=73
質問項目	選択肢 まったくそ うではない	そ う で は な い	ど ち ら と も い え な い	ま あ ま あ そ う で あ る	ま っ た く そ う で あ る	無 回 答	計
①	0	0	3 (4.1)	33 (45.2)	37 (50.7)	0	73 (100)
②	0	0	3 (4.1)	11 (15.1)	59 (80.8)	0	73 (100)
③	0	0	1 (1.4)	12 (16.4)	60 (82.2)	0	73 (100)
④	0	0	1 (1.4)	19 (26.0)	53 (72.6)	0	73 (100)
⑤	0	2 (2.7)	17 (23.3)	38 (52.1)	16 (21.9)	0	73 (100)
⑥	0	0	9 (12.3)	39 (53.4)	25 (34.2)	0	73 (100)
⑦	0	0	9 (12.3)	34 (46.6)	30 (41.1)	0	73 (100)
⑧	0	0	3 (4.1)	42 (57.5)	28 (38.4)	0	73 (100)
⑨	0	0	4 (5.5)	21 (28.8)	48 (65.8)	0	73 (100)
⑩	0	1 (1.4)	8 (11.0)	40 (54.8)	24 (32.9)	0	73 (100)
⑪	0	2 (2.7)	11 (15.1)	37 (50.7)	23 (31.5)	0	73 (100)
⑫	0	0	3 (4.1)	12 (16.4)	58 (79.5)	0	73 (100)
⑬	0	1 (1.4)	3 (4.1)	30 (41.1)	39 (53.4)	0	73 (100)
⑭	0	3 (4.1)	11 (15.1)	37 (50.7)	22 (30.1)	0	73 (100)
⑮	0	1 (1.4)	7 (9.6)	32 (43.8)	33 (45.2)	0	73 (100)

項目あった。'まったくそうではない'への回答はいずれの質問項目にもみられなかった。

2. アンケート結果の概略（終了時）

アンケート結果の概略（表1）のうち終了時をみると、15のすべての質問項目において'まったくそうである'への回答がみられ、そのうち最多の学生が'まったくそうである'に回答している項目は①、②、③、④、⑨、⑫、⑬、⑮の8つであった。'まったくそうである'にもっとも多くの回答を得た質問項目は、③であった（60人、82.2%）。反対に、'そうではない'にもっとも多くの回答があった

のは、⑭であった（3人、4.1%）。

同じく終了時で'そうではない'という回答のあった質問項目は⑤、⑩、⑪、⑬、⑭、⑮の6項目あった。'まったくそうではない'への回答はいずれの質問項目にもみられなかった。

3. アンケート結果の概略における開始前と終了時の比較

開始前と終了時のアンケート結果をみくらべてみると、15の質問項目のそれぞれにおける最多の回答は、おしなべてより肯定的な回答の選択肢へひとつ移動しているか、その選択肢にとどまってもより肯定的な選択肢の割合を増や

している。たとえば⑥では、開始前には‘まあまあそうである’の割合が63.3%あったが、終了時には53.4%にさがっている。しかし、同じ項目の‘まったくそうである’の割合は開始前に0.0%であったものが、終了時には34.2%と増えている。

開始前と終了時で‘そうではない’に回答のあった質問項目は、それぞれ8項目と6項目あったが、どちらにも共通してみられた質問項目は⑤、⑩、⑬、⑭の4項目であった。開始前には‘そうではない’に回答があったのに終了時にはなくなっていた質問項目は、④、⑦、⑧、⑨の4項目であった。反対に開始前には‘そうではない’は0人であったのに、終了時にその選択肢に回答のあったものが、質問項目⑪に2人(2.7%)、⑮に1人(1.4%)あった。

4. 自由記述について

自由記述は、開始前には8件の記入があり、終了時には14件の記入があった。開始前では、楽しみや不安という記載がある一方で「学びたい大人としてのコミュニケーション」とか「コミュニケーション力を高めたい」といった記載があった。開始前の自由記述の要約は、その内容から【授業に対する前向きで意欲的な姿勢】【授業に対する不安と緊張】

緊張】というカテゴリに大別された。

終了時では「不安だったが楽しく友達ができた」といった記載や「医療人にコミュニケーション能力は重要なことと再認識」した、「開始前のアンケートは自信なかったが、今はコミュニケーションの自信と意欲がわいた」といった回答があった。これらの終了時の自由記述の要約は、その内容から【コミュニケーション理解の深化】【入学時にこの方法で授業することの仲間づくりの効果】【授業の目的に対する評価】といったカテゴリに集約された(表2)。

V. 考 察

1. 保健医療総論1の目的と科目の運営

保健医療総論1の目的は、対人関係の希薄化が懸念されるなか医療人としての対人コミュニケーション力を涵養することである。そのため、講演、演習、報告会といった柱で科目を構成し、学生には少人数のグループを形成してもらい学習の効果を狙っている。アンケート結果をみると、少人数のグループ単位での学習が入学直後の時期に行われることで効果をもたらしている可能性がある。自由記述のカテゴリをみると開始前には【授業に対する不安と緊張】

表2 自由記述の要約とそのカテゴリ

開始前・オリエンテーション時	
カテゴリ	自由記述の要約
【授業に対する前向きで意欲的な姿勢】	<ul style="list-style-type: none"> ・内容が濃く交流が深まる機会に楽しい活動 ・できるだけ多くコミュニケーションし今後に生かせること見つけた ・学びたい大人としてのコミュニケーション ・目上の人とのコミュニケーション学びたい ・コミュニケーション力を高めたい ・バイトで培った敬語の知識を活用したい
【授業に対する不安と緊張】	<ul style="list-style-type: none"> ・相手にわかってもらえるか、役割果たせるか不安 ・インタビュー緊張しレポートも不安
終了時	
カテゴリ	自由記述の要約
【コミュニケーション理解の深化】	<ul style="list-style-type: none"> ・医療人にコミュニケーション能力は重要なことと再認識 ・コミュニケーションが理解できる授業だった ・コミュニケーションについて深く理解できた・グループワークは良い経験 ・開始前のアンケートは自信なかったが、今はコミュニケーションの自信と意欲がわいた ・コミュニケーションをグループワークを通じて学べた
【入学時にこの方法で授業することの仲間づくりの効果】	<ul style="list-style-type: none"> ・他学科の学生とコミュニケーションでき有意義 ・今の自分たちに必要なのでこの時期でよかった ・不安だったが楽しく友達ができた ・仲良くなれるきっかけができた良い授業だった ・グループで仲良くなれてよかった
【授業の目的に対する評価】	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビューで大切なことを多く聞けた ・医療人を目指す自分たちに必要なことを学べた ・発表は難しいができるようになりたい ・報告会はたいへん

を経験していた学生が、終了時には【入学時にこの方法で授業することの仲間づくりの効果】を実感し、【コミュニケーション理解の深化】を果たしていることが伺える。特に今後の4年間を一緒に過ごす仲間と出会い「不安だったが楽しく友達ができた」と報告されていることは、対人関係の希薄化に対しても効果的だろう。そのような観点から保健医療総論1の運営は、目的の達成に合致したやり方で進められていると考えられる。

2. アンケートの必要性

前段で、学習効果を検討し授業の改善に役立てるため授業開始前と終了時に学生に向けたアンケートを実施した、とアンケートの実施理由を述べた。実施した結果を眺望すると、15の質問項目のそれぞれにおける最多の回答は、おしなべてより肯定的な選択肢へ一つ移動しているか、その選択肢にとどまってもより肯定的な選択肢の割合を増やしている。これにより、学生は不安や期待の中、仲間と共に学びながら、教員側の期待以上に学習の課題を自信につながる方向でこなし【授業の目的に対する評価】も自ら行っている様子が伺える。これらはアンケートを実施しない限り得られなかった知見である。特に保健医療総論1は、4年次まで連続する保健医療総論という科目のスタートに位置する。保健医療総論1の学習効果を新カリキュラムの完成年度を迎えるこの時点で検討することは、いわば必須の課題であっただろう。

3. オリエンテーションについて

1) オリエンテーションの内容と学生の理解度

アンケートに関するオリエンテーションは、授業の前週の新入生オリエンテーション時と授業の開始前の2回行われている。そこでは、口頭と文書でアンケートの説明を行ったが、学生がどの程度アンケートの趣旨や回収方法を理解できたのかについては不明である。アンケートの結果から、学生は【授業に対する前向きで意欲的な姿勢】もみせているが、同時に【授業に対する不安と緊張】も持ち合わせている。できる限り学生のアンケートの趣旨や方法に対する理解度を高めることが授業に前向きに臨んでもらうために必要である。

2) オリエンテーションの内容の周知の度合い

保健医療総論1のオリエンテーションの内容の周知度を知る一つの方法として、アンケートの質問項目に、オリエンテーションの内容は十分であったか、アンケートの実施に関する説明は理解できたか、といった質問項目を設けることも検討に値するだろう。

4. 開始前と終了時アンケート結果から伺える学習効果

開始前よりも終了時により否定的な選択肢に回答のあった質問項目は⑩、⑮の2つであった。これらは他者との協調連携が求められる内容であり、演習の難しさを実感した

学生の存在を示している可能性がある。奈良⁴⁾は、学生が多様な患者と的確にコミュニケーションするためには演習など実践に即した技術教育の確立が必要である、という。保健医療総論1は、大学に入学したばかりの学生にとってはまさに実践に即した臨床的場面であり、難しさを感じることもコミュニケーション力を培うために有用であるといえるだろう。

5. 本報告の限界と今後の課題

開始前の回収率は3割(33.3%)にとどまり、終了時の回収率とかなりの差が生じてしまった。開始前アンケートの回収率を上げるために、情報提供の仕方や回収のタイミング、方法を今後検討していきたい。

VI. 謝 辞

アンケートに協力してくれた学生たちに感謝いたします。

文 献

- 1) 菊池章夫：Kiss-18研究ノート．岩手県立大学社会福祉学部紀要6(2)：41-51, 2004
- 2) 津村俊充：ラボラトリ・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果－社会的スキル測定尺度Kiss-18を手がかりとして－．アカデミア．人文・社会科学編(74)：291-320, 2002
- 3) 森田朱音：対人関係の解消に関する研究－友人関係の消極的維持－．九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻修士論文，
www.hues.kyushu-u.ac.jp/education/student/thesis.html#thesis01, 2015.02.06
- 4) 奈良知子：看護学生のコミュニケーション技術教育の効果と問題点．弘前医療福祉大学1(1)：59-66, 2009
- 5) 堀口雅美，澤田雄二，根本慎他：保健医療福祉施設における看護・理学・作業療法学科合同の実習科目「保健医療総論Ⅱ」に関する学生への質問紙調査．札幌医科大学保健医療学部紀要10：11-18, 2007